

## 良くなりたいか

ヨハネの福音書 5章 1-9節

### はじめに

今日の聖書箇所には、「エルサレム」にある「**ベテスダと呼ばれる池**」で起きたイエス様の癒しの奇蹟が書かれています。イエス様は、「**ユダヤ人の祭り**」があるというので、エルサレムにやって来ました。そしてイエス様は、エルサレムの中にある「ベテスダ」と呼ばれる池にやって来たのです。「ベテスダ」というのは、「あわれみの家」という意味で、この池には、3節にあるように、「**病人、目の見えない人、足の不自由な人、からだに麻痺のある人たちが大勢、横になっていた**」のです。

というのは、新改訳聖書の脚注にあるように、この池には一つの言い伝えがあって、「**主の使いが時々この池に降りて来て水を動かす**」というのです。そして「**水が動かされてから最初に入った者が、どのような病気にかかっている者でも癒された**」というのです。この主の使いによる癒しの奇蹟が本当に起きていたのかどうかは分かりません。おそらく言い伝えであって、迷信であったと思います。しかし、大勢の病人たちは、この言い伝えを信じて、この池に集まって来ていたのです。

この言い伝えでは、水が動いた時に池に入った人が全員、癒されるというわけではありません。水が動いた時に癒されるのは、ただ一人だけでした。最初に池に入った人だけでした。この池に集まって来た人たちは、皆が病気を癒されたいと願っている人たちでした。ですから、水が動いた時には、われ先にと皆が池の中に飛び込んで行ったのではないのでしょうか。譲り合う余裕などなく、他人を押しつけてでも池の中に飛び込んで行く、そういう人間の自己中心性がむき出しになるような光景がそこにはあったのではないのでしょうか。周りは病人ばかりですが、この池には激しい競争社会があったのです。「あわれみの家」という名前とは、ほど遠い状況がここにあったのです。

### 1. 三十八年も病気にかかっている人

さて、その池に集まっていた大勢の病人たちの中に、「**三十八年も病気にかかっている人**」がいたのです。彼は、生まれつき病気だったのか、それとも人生の途中で病気になったのかは分かりません。彼は、イエス様によってその病気を癒されるのですが、癒やされた後にイエス様は彼にこう言われます。「**見なさい。あなたは良くなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれない**」。彼はイエス様に「もう罪を犯してはなりません」と言われているので、彼の病気は、彼の罪と関係があるのかもしれない。もしかしたら、彼の罪が病気の原因となっていたのかもしれない。いずれにしても彼は、三十

八年という想像も絶する長い年月の間、病気に苦しめられていたのです。

彼が具体的にどんな病気だったのかは分かりません。6節を見ると、彼は「横になって」いたとあります。また8節でイエス様に、「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われるので、彼の病気は自分で歩けない病気であったようです。足が不自由であったのか、からだに麻痺があったのかは分かりませんが、とにかく自分では歩けず、いつも横になっている状態であったようです。

よく比較されるのですが、「カペナウム」という町で、イエス様に中風の病気を癒された人がいます。彼もイエス様に、「起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい」(マルコ2:11)と言われます。両者とも、イエス様に「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われるのです。しかし両者には、決定的に違うことがあります。それは、カペナウムの中風の人には、四人の友人がいて、彼のために屋根をはがして穴を開け、寝床をつり降ろしてまでイエス様のもとに連れて行ってくれた人たちがいたのです。しかし、ベテスダの池にいた三十八年も病気にかかっていた人には、友人がいませんでした。彼は7節で、「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます」とイエス様に言っています。彼には、彼の病気を心から心配し、彼を助けてくれる人がいなかったのです。

彼は、三十八年という長い年月の間、病気に苦しんでいました。彼は寝たきりで、自分で歩くことができませんでした。しかし、彼を心配してくれる人、彼を助けてくれる人がいなかったのです。彼の周りには、自分の病気のことでも精一杯の人たちしかいなかったのです。

そのような中で、彼はこの池の言い伝えを信じていました。しかし、水が動いた時に、真っ先に自分を池の中に入れてくれる人、自分を助けてくれる人がいなかったのです。彼は、この池の言い伝えを信じ、微かな希望を持ちながらも、自分を助けてくれる人がいないという現実の中で、絶望していたのではないのでしょうか。

## 2. 池の中に入れてくれる人を求めていた

イエス様は、そんな彼に目を留められます。この池には大勢の病人たちがいましたが、その中でも特に長い間、彼が病気に苦しんでいることを知ったからです。彼がいつからこの池にいたのかは分かりませんが、とにかく彼は長い間、現実に絶望しながらも、微かな希望を抱いて、この池に留まり続けていたのです。

そんな彼にイエス様は、「良くなりたいか」と声をかけられます。三十八年もの長い間、病気に苦しんでいる人が、良くなりたくないわけがありません。しかし彼はイエス様に、「良くなりたいです」とは答えませんでした。彼は、「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます」と答えます。彼が答えたのは、「良くなりたいたい」とか「良くなりたくない」とかではなく、目の前の現実に対する絶望の言葉です。

彼は、この池の言い伝えを信じていました。そしてこの池に希望を持って生きていました。そして、水が動いた時に、誰よりも先に自分を池の中に入れてくれる人を求めていたのです。

イエス様が彼に声をかけた時、彼はイエス様こそ自分を池の中に入れてくれる人だと期待したのかもしれませんが。彼は、イエス様がどんな人か知りませんでした。彼は、イエス様に癒された後、人々から「床を取り上げて歩け」とあなたに言った人は誰かと聞かれた時、彼は答えることができなかつたのです。イエス様のことを全く知らなかつたからです。彼は、イエス様が神の子であることを知りませんでした。彼は、イエス様に対する信仰を持っていませんでした。彼が持っていたのは、この池の言い伝えに対する信仰だけです。

彼がイエス様に期待していたことは、自分を池の中に入れてくれることです。自分を助け、この池の競争社会の中で勝たせてくれることです。彼は、イエス様に希望を持っていたのではなく、この池に希望を持っていたのです。

### **3. 起きて床を取り上げ、歩きなさい**

しかしイエス様は彼に、「それなら、わたしがあなたを、誰よりも先に池の中に入れてあげよう」とは言われませんでした。イエス様は彼に、「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われたのです。そうして御自身の言葉によって、彼の病気を癒されたのです。イエス様は、彼を池の中に入れて癒すのではなく、御自身の言葉によって癒されたのです。

イエス様は彼に、「良くなりたいか」と尋ねました。しかし彼は、自分が良くなる方法は一つしかない、自分が良くなる方法はこの池の中に誰よりも先に入ることだと信じて疑わなかつたのです。しかしイエス様は全く別の方法で、彼を癒されたのです。池の力ではなく、御自身の力によって、御自身の御言葉によって彼を癒されたのです。イエス様は彼に、「良くなりたいか」と聞かれた時、「良くなりたいたら、わたしを信じ、わたしに希望を持ちなさい、またわたしの言葉に耳を傾けなさい」と言おうとされたのではないのでしょうか。

彼はイエス様を知りませんでした。イエス様が神の子であることも、全知全能の神御自身であることも知りませんでした。彼はこれまで、「良くなる方法」を間違えていたのです。彼は、この池の言い伝えを信じて、この池に希望を抱いて生きてきました。しかし彼は本来、イエス様を信じ、イエス様に希望を抱くべきだったのです。この池の言い伝えを信じて、この池に希望を抱いて生きてきた彼は、何を待たでしょうか。彼は、現実に絶望するしかなかつたのです。彼は、信ずべきものを、希望を抱くべきものを間違えていたのです。そのことを教えるために、イエス様は彼に目を留め、彼に声をかけられたのではないのでしょうか。「あなたが信じ、希望を抱くべきものは、この池ではなく、わたしであり、わたしの言葉である」、イエス様は彼に、そのことを教えようとされたのではないのでしょうか。

彼は三十八年という長い間、この池を信じ、希望を抱いて生きてきましたが、全く別のものによって癒され、立ち上がり、歩き出すことができたのです。それは、イエス様ご自身であり、イエス様の御言葉だったのです。

### **おわりに**

この出来事から私たちに問われていることは、私たちは何を信じ、何に希望を抱いて生き

ているのだろうかということです。私たちは、イエス様を信じ、イエス様に希望を抱いて生きていられるだろうか、それともベテスタの池の言い伝えのように、イエス様以外のもの、この世の価値観、人々の言い伝えなどを信じ、希望を抱いて生きていられるでしょうか。

この出来事が私たちに教えていることは、私たちが信じ、希望を抱くものを間違えてはならないということ、私たちが信じ、希望を抱くべきものは、イエス様ご自身であり、イエス様の御言葉であるということです。イエス様は、私たちに「良くなりたか」と問われます。私たちがもし「良くなりたか」、「変わりたい」と願うなら、ベテスタの池ではなく、イエス様を信じ、イエス様の御言葉に耳を傾け、イエス様の御言葉に聞き従わなければなりません。イエス様の御言葉こそ、私たちに絶望の中から立ち上がらせる力があるのです。イエス様の御言葉こそ、絶望の中から私たちに希望を与えてくれるものです。イエス様の御言葉こそ、もう一度、人生を歩んでいく力を与えてくれるものです。

イエス様は彼に、「起きなさい」と言われました。この「起きなさい」という言葉は、他の個所では、「よみがえる」と訳される言葉です。つまり死人が生き返ることを意味する言葉です。ラザロが「よみがえった」、またイエス様が「よみがえった」という時に使われる言葉です。彼の足は、三十八年間も立てず、歩けなかったのです。つまり彼の足は、「死んでいた」のです。その彼の足に向かってイエス様は、「よみがえりなさい」と言われたのです。イエス様は、彼の死んだ足をよみがえらせたのです。あのラザロを死人の中からよみがえらせたように、彼の足もよみがえらせたのです。ご自身が死者の中からよみがえったように、彼の足もよみがえらせたのです。イエス様は、死者をよみがえらせることのできる方です。彼の足は死んでいましたが、彼は霊的にも死んでいました。愛に絶望し、イエス様を求めてもいませんでした。イエス様が誰であるかも知りませんでした。しかしイエス様は、肉体的にも霊的にも死んでいた彼を、よみがえらせたのです。

私たちは、イエス様の「良くなりたか」という語りかけに何と答えるでしょうか。私たちがどこか、諦めを持っていないでしょうか。お金がないとか、人が足りないとか、「良くなりたか」理由を色々考えて、諦めていないでしょうか。仏教は、苦しみからの救いを説きますが、その苦しみから解放されるためには、「悟り」を得ることが大切だと教えます。ではその「悟り」とは何かと言えば、「諦めること」です。私たち人間が苦しむのは、「諦めることが悪いこと」に原因があると教えるのです。私たち人間は何かを手に入れても必ず失っていく、そのことを諦められず、受け入れられずにもがいている、そこに私たち人間の苦しみがあると言うのです。私たちの人生はそういうものだとして受け入れて、諦めてしまえば、苦しみから救われる、そのように悟れば、心が楽になると教えるのです。

諦めること、受け入れること、それは時には大切なことかもしれません。しかし、私たちが信じている方は、死者の中からよみがえられたイエス様であり、この天地を無から造られた神様です。その方を信じている私たちは、すべてを諦めて良いのでしょうか。もしその方が、「良くなりたか」と私たちに語りかけるのだとしたら、「良くなりたか」理由を色々考えるのではなく、死者をもよみがえらせるイエス様の力、天地を無から造られる神様の力

を信じて、「良くなりたいです」と答えるべきではないでしょうか。この方に、賭けてみるべきではないでしょうか。

9節を見ると、この出来事が起こったのは「安息日」であったとあります。この出来事を通して私たちは、安息日は、イエス様が御言葉を通して私たちを癒し、私たちをよみがえらせ、立ち上がらせ、私たちに歩き出す力を与える日であることを教えられます。私たちの安息日は、日曜日です。なぜならイエス様が死からよみがえられたのが日曜日であったからです。そして私たちは、日曜日に集まって礼拝をささげます。この日曜日の礼拝を通して、私たちはイエス様から「良くなりたいか」と問いかけられ、「よみがえりなさい」という言葉を与えられて、もう一度立ち上がる力、もう一度歩き出す力を与えられるのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

イエス様こそ全知全能の神であり、イエス様にこそ、私たちの希望と力があります。私たちが、ベテスダの池のようなものではなく、あなた御自身に、またあなたの御言葉を信じ、希望を抱いていくことができますように。あなたの「良くなりたいか」という問いかけに、素直に答えることができますように。また「よみがえりなさい」という御言葉を信じて、自分を委ねていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。